

## 民主化を担った文学：Understood Betsyと「理想的アメリカ」像

著者	鈴木 紀子
雑誌名	大妻女子大学紀要．文系
巻	52
ページ	170-154
発行年	2020-03-13
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00006854/">http://id.nii.ac.jp/1114/00006854/</a>



## 民主化を担った文学

—— *Understood Betsy* と「理想的アメリカ」像 ——

鈴木 紀子

【キーワード】 *Understood Betsy*, ドロシー・キャンフィールド・フィッシャー, アメリカ日本民主化教育, アメリカ国家像

*Understood Betsy* (1917) は、1910 年代から 20 年代を中心に活躍したアメリカの作家、教育者、社会改革運動家であるドロシー・キャンフィールド・フィッシャー (Dorothy Canfield Fisher, 1879-1958) の代表的な児童文学作品である。現在では本国アメリカでも日本でもその知名度は低くなってしまったが、キャンフィールド・フィッシャー<sup>(1)</sup> は長編小説二十二作、ノンフィクション十八作、更に数百に及ぶ教育や歴史に関する記事などの著作物を残した当時のベストセラー作家であり、優れた文学者であった。キャンフィールドは小説の舞台の多くを母親の故郷であり自身も没するまで長きにわたり人生を過ごしたヴァーモント州に設定しているが、その彼女の文学的・教育的功績を讃え、ヴァーモント州 Department of Library は 1917 年より現在に至るまで Dorothy Canfield Fisher Book Award という彼女の名を冠した児童文学賞を主催している。また教育者、社会改革運動家としても高名であった彼女は、地方および州や国の教育機関に従事、中でもイタリア発祥の児童教育法「モンテッソーリ教育」(Montessori Education) をアメリカの学校教育に導入、普及させることに貢献したことで広く知られている。更に第一次大戦後には戦地であったフランスにおいて戦傷軍人の救護や小児患者の静養所設立などの支援活動に奮闘した。それらの功績から、彼女はエレノア・ローズベルト (Eleanor Roosevelt) により「アメリカでもっとも影響力を持つ女性」の一人に名を挙げ讃えられている。

このように、二十世紀初頭のアメリカ教育界および文学界で重要人物であったキャンフィールドだが、彼女は第二次世界大戦後アメリカによる占領下日本の民主化政策と間接的ながらある関わりを持つ。その関わりとは、彼女のベストセラー児童書 *Understood Betsy* が戦後日本の民主化教育材料の一つとして選抜されたことである。日本の敗戦後、連合国軍最高司令官総司令部 (General Headquarters, Supreme Commander for the Allied Powers, 以下 GHQ/SCAP) 指導の下遂行された日本民主化政策では、日本に民主主義理念およびアメリカの生活様式 (American way of life) を教示、移植するためにアメリカの文学作品がその教材として利用された。GHQ/SCAP の一機関、民間情報教育局 (Civil Information and Education Section, 以下 CIE) は「占領目的を更に促進する」(GHQ/SCAP 13) 策として、日本にアメリカ式民主主義を教授するに相応しい文学作品や書物を選抜し、それらを占領下日本の民主化教育材料として日本語翻訳・出版する為の入札制度を 1948 年より導入した。アメリカの書物を速やかに翻訳、出版することで、それら書物の日本人大衆への普及促進を図ったのである。換言すれば、それら文学作品はアメリカの民主主義

思想や当国の理想的イメージを戦後日本人に植え付けるためのソフト・パワーとしての機能を付与されたのである。この CIE によってアメリカの理想的な姿を映し出すとされた四百七十四冊に上る選抜文学作品の一つに、*Understood Betsy* は選ばれている。当作品は、CIE の著作権付き外国語図書の翻訳・出版奨励のための入札制度を通して 1948 年の第二回入札によって翻訳権が与えられ、その後 1950 年（昭和 25 年）11 月に評論社より日本語版『ベッチィ物語』（中野好夫・中村妙子共訳）として出版された<sup>(2)</sup>。

占領下日本が「ポツダム宣言で宣言した義務の遂行に貢献」、すなわち敗戦後日本の民主化という再生に「貢献し得る」<sup>(3)</sup> 一冊として CIE 選抜図書に選ばれたキャンフィールドの *Understood Betsy* であるが、ではこの児童文学書は具体的にどのように民主化教育材料として適切であると判断されたのであろうか。つまりこの物語のどのような点がアメリカの民主主義理念を理想的且つ効果的に表し日本人に伝え得ると考えられたのであろうか。これまでの筆者の調査では、残念ながら彼女の作品を含めいかなる CIE 選抜図書の明確な選抜理由、選抜者等を明示する資料は発見されておらず、実際の CIE の図書選抜ではアメリカの民主主義理念の教示を基軸に国務省やアメリカ図書館協会など様々な組織が連携しながらも、それが明文化された指示体系の下に行われたものではなかったようであることから、それぞれの作品が具体的にどのような理由によって、いつ誰に選抜されたものか記録されていた可能性は低く、当作品の選抜理由の確認を資料に依拠することは難しい<sup>(4)</sup>。しかしながら、この作品のどのような要素が占領下日本人にとって有益であると占領軍側が捉えたのかを考察することは、CIE 関係者のこの作品の戦後の政治的文脈における解釈の仕方と共に、当時アメリカがどのような民主国家としての自画像を描き、どのようなアメリカを戦後再建期日本に教示することを意図していたのかを測る上で有益な作業であろう。

そこで本稿では、キャンフィールドによる *Understood Betsy* が描き出し得る「理想的民主主義国家アメリカ」の姿とはいかなるものであるか考察を行う。この作品は、中西部都市に住む臆病で他者依存傾向の強い孤児の少女エリザベス・アン（Elizabeth Ann）がヴァーモント州の田舎の親類に引き取られ、そこで新たな生活を送る中で劇的な人間的变化を遂げる成長物語であるが、この物語がどのように「理想的アメリカ像」を発し得るかを考察し、当作品が CIE 選抜図書に含まれたその原因を追究する。

だが特筆すべきは、本作品はジェンダーの描写に着目した場合、単にアメリカを無条件に賛美する物語ではないということだ。この物語は、一見すれば両親を失った恵まれぬ少女が温かな家庭に迎えられ自立心溢れる少女へと成長する家庭小説的な物語であり、伝統的な核家族形態に基づく家族関係、男女関係を描いていると言える。しかし、彼女の成長を左右する登場人物の女性の描写には、作者自身の思想と思われる、アメリカの伝統的な家父長制に基づく女性性概念への挑戦が随所に見られる。例えば、この作品で主人公エリザベス・アンが最終的に畏敬、憧憬の念を持って理想化、自己同一視する彼女のおば<sup>(5)</sup> アン（Cousin Ann）は、屋外労働作業により日に焼けた茶色の肌、筋肉質な身体を持ち、男性の衣服を纏い男性主体とされる役割や地位を担う男性的イメージで現れる。この“mannish woman”（Cummins 27）アンに影響を受け、主人公エリザベス・アンは瞬間に好ましい人間の成長を遂げる。つまり、本作品が出された 1910 年代末当時流通していた伝統的な女性像——淑女（Lady）を女性性の条件とした女性像——に明らかに挑戦する女性像アンを理想化する描写は、本作品を単にアメリカの十九世紀的な伝統的思想をロマンチックに称揚する物語ではなく、ジューン・カミンズがこの作品は「アメリカニズムを本質化するのではなくジェンダーや民族的差異を内包させることによって『拡大』させる」（Cummins 16）と指摘するように、激動の時代と言われる 1920 年代を目前に、新たな「アメリカ」の在り様を提起する急進的作

品にしている。

しかし、アンが象徴的に表すこの新しい女性像が、戦後 1940 年代後半の CIE 関係者らアメリカ人にとって「理想的アメリカ」の姿として既に定着し、占領下日本に教示されるべきアメリカのイメージとして受け入れられていたとは考えにくい。なぜなら、GHQ/SCAP による日本占領政策は、男性を家長とする厳格な日本の封建社会および家制度の解体を一つの民主化プロセスとして重要視しながらも、GHQ/SCAP はあくまで女性を家庭、男性を公的領域と結びつける十九世紀家父長制に基づくジェンダー概念を理想的社会生活の基盤としていたためである。つまり GHQ/SCAP はアメリカの十九世紀末までに創り上げられた伝統的価値基準に基づくアメリカ的生活様式を「理想的アメリカ像」として戦後日本に教授することを意図していたのであり、上村千賀子が指摘する通り、伝統的ジェンダー関係を転覆させるような形での日本の社会改革や、女性が「本来の役割」を超えるようなフェミニズム運動の展開を容認するものではなかったのである（上村 23）。これは、本作品は CIE によってアメリカの理想的国家像を描くものとして選抜されながら、ジェンダーの面においては戦後 1940 年代後半当時としても急進的なフェミニズム的思想を内包し、延いては新たなアメリカの国家像を示す挑戦的なものであった可能性を意味する。見方を変えれば、様々な解釈が可能である文学作品を政治的な民主化教育材料として用いたアメリカの占領政策が、実は占領関係者が意図したアメリカの理想的国家像を具現化すると同時に修正、再形成する両義性を自らの内に孕んでいたことを示すとも言えるだろう。

これらの点を踏まえ、本論文は、戦後日本の民主化を担うことを期待されたアメリカ文学の一つ、キャンフィールドの *Understood Betsy* をアメリカン・イメージの形成という視点から考察し、CIE の抱いた理想的民主国家アメリカとしての自画像の一端を提示すると共に、この文学作品がジェンダーの面においてその国家像を刷新する作用を持ち得た可能性を指摘し、伝統と急進性を併せ持つ本作品が生み出すアメリカの国家像を探る。

*Understood Betsy* は、九歳の主人公の少女エリザベス・アンが、極度に神経質で何ごとにも過敏に反応するおばフランシス（Aunt Frances）の庇護の元から予期せぬ出来事によって引き離され、代わりに親戚のバットニー農場（The Putney Farm）に送られるが、そこでの新たな生活を通し、以前の神経質で心身共に虚弱な少女から、強い精神と肉体を持つ自立心溢れる少女へと劇的な変化を遂げる *Bildungsroman*、成長の物語である。

“[A] medium-sized city in a medium-sized state in the middle of this country”（1）<sup>6)</sup>で、共に小柄でか細いおばフランシスとその母の大おばハリエット（Great-aunt Harriet）、そしてこの二人の家事手伝いである痩せ細って喘息持ちのグレース（Grace）に育てられたエリザベス・アンは、瘦身に青白い顔で常に怯えた表情を浮かべた神経質な少女として現れる。彼女を「誰よりも理解している」と豪語するおばフランシスは、エリザベス・アンを繊細で神経過敏で弱弱しい子供と決めつけ、九歳にもなる彼女を毎朝こし服を着せ髪を結ってあげては彼女の学校の教室まで付いて行き、散歩中に犬がいれば彼女が怖がる前から自身がほぼパニック状態で犬を追い払い、更には病気でもないのに彼女を医者に診せる有様である。エリザベス・アンはそんなフランシスに深い安心感を抱き、“Oh, how glad she was that she had Aunt Frances there to take care of her, ...”（7）と彼女に世話をされ庇護されることに安らぎと喜びを覚える。

この二人の関係で特徴的なのは、二人が常に互いを理解しようと何もかも言葉にして「説明」（explain）しようとする点である。フランシスは、エリザベス・アンを理解するために、彼女に何でも自分に話すことを半ば強制する（“You’ll always tell Aunt Frances *everything*, won’t you,

darling?” (8) イタリック体原文)。またフランシスは親が子供に完全に共感してやることを最善の教育法として信奉しているがゆえに、日々エリザベス・アンの夢の内容を分析し彼女の潜在的思考までも把握しようと懸命である。これらの行動は皮肉にもフランシスがエリザベス・アンを客観的に観察し、判断や理解をすることが出来ていないことの証左であるが、しかしエリザベス・アンはそんなフランシスを「おばさんは私を分かってくれているのよ！」([S]he *understands* me!” (8) イタリック体原文) とフランシスとの自己同一視を強める。

そんな彼女に転機が訪れる。ハリエットが肺の病に罹り、高地にて静養しなければならないのだ。肺病の伝染防止に、エリザベス・アンはハリエットと母親の看護役をしなければならないフランシスから引き離され、こともあろうにおば達が「変人」(queer) と忌み嫌うヴァーモント州に住む親類のパットニー家へと送られてしまう。絶望に打ちひしがれるエリザベス・アンだが、恐れていたはずのパットニー家の人々とヴァーモントの山林地帯の自然豊かな環境が、彼女を瞬く間に強い心身と主体性に富む自立した少女へと変貌させることになる。

パットニー家で彼女を著しく成長させるのは、彼女が日々新たな経験を通し得る幾つもの「気付き」である。パットニー家に到着当初は、フランシス達の街の暮らしとは全く異なる田舎の農場生活に大いに困惑し、軽蔑的な眼差しすら向けるエリザベス・アン——ここからはパットニー家の彼女の呼び方に従いベッツィー (Betsy) ——だが、農場での暮らしや仕事の手伝いを通してものを作ることの面白さ、労働から得られる達成感、食の有難みなど、総じて生きることへの喜び、自ら何かを生み出すことから得られる充足感といった、フランシス達との生活の中では決して得られなかった経験を積み重ねることになる。農場での八か月の短期間で、青白い顔でフランシスのスカートの後ろに隠れてばかりの虚弱で幼稚だったエリザベス・アンが、“a dark-eyed, red-cheeked, sturdy girl, standing straight on two strong legs, holding her head high and free, her dark eyes looking out brightly from her tanned face” (133) と表される強く逞しい少女ベッツィーへと変貌を遂げるのだ。

ベッツィーを変貌させ人間的成長に導く幾つもの気付きの中でも、とりわけ重要なものの一つが、彼女のアメリカの過去と現在の有機的な繋がりへの気付きと、そこから派生するベッツィー自身のアメリカ人としての自己意識への目覚めである。例えばベッツィーは、パットニー家到着の翌日、地下の牛乳部屋 (the milk room) で大おばアビゲイル (Aunt Abigail) とバター作りを経験する。以前の街ではバターは常に店に置いてある商品であり、“I don’t know what you make butter out of” (41) とバターが何からどのように作られるか考えもしなかったベッツィーにとって、おば達が飼育した乳牛から搾乳し、その乳を攪拌しバターを生み出す工程は彼女が「(ピアノを弾くことと字を書くこと以外) 自らの手を使って行った初めてのこと」 (“the first time Elizabeth Ann tried to do anything with her hands...” (44)) であり、何物も原料と生み出す工程と人の手による作業があることを学ぶ契機となる。彼女は始め新鮮なバターを上手く手で丸めることが出来ず困惑するのだが、その彼女の姿を見たアビゲイルは、自分も五歳程の少女の頃初めてバター作りを手伝わせてもらった時には上手く出来なかったものだ彼女を慰める。この会話の中で、アビゲイルに初めてバター作りを教えた大おばというのが「独立宣言書に署名が成された」(45) 1776 年生まれで、その大おばもアビゲイルもベッツィーが現にいる同じ牛乳部屋でバター作りをしていたのだと話す。これを耳にしたベッツィーは、“Why! There were real people living when the Declaration of Independence was signed — real people, not just history people ... right in this very room, on this very floor, ...!” (45) と驚愕する。彼女にとって、「小さな女の子をテストするためだけの」 (“living only inside her schoolbooks for little girls to be examined about”) (45) 実在しない



空虚なものに過ぎなかった「歴史」というものが、この瞬間アビゲイルと牛乳部屋という実体を通して命を吹き込まれるのだ。この経験が、“[I]t was an impression which was to come again and again during the next few months.” (46)と彼女に繰り返す過去と自分のいる現在という時の連続性を認識させることになる。

この過去と自身の現在との繋がりに気付いたベッツィは、更にその時の連続性の中で系譜的、国民的帰属意識に芽生えていく。上記のバター作り経験のように、ベッツィは通い始めた学校で自分が使うことになった勉強机がパットニー家の大おじヘンリー（Uncle Henry）とその父親が少年時代実際に使用した机であることを知ると、“she was feeling a little of the same rapt wonder that people in the past were really people, …” (72)と恍惚とする。更に、この机の会話の中で、彼女がその日まさに勉強してきた学校がジョージ・ワシントン初代大統領が生前の頃既に建てていたと聞かされ、再び驚愕と強い関心を覚える。そこから、学校が森の木を人々が切り倒して板にし、それを組み合わせて手作業で作られたこと、1763年にコネチカットからベッツィの先祖達が開拓者としてヴァーモントの地に入植してきたこと、独立戦争（1775年）が勃発した時には既に多くの入植者達が森には熊などの野生動物が希少になっていたことなどを知る。更に、時計が発明される以前は日時計で人々が時間を測っていたこと、そしてその日時計が家の中に現存し、アビゲイルがそれを使ってほぼ正確な時間を陰の長さで言い当てるのを目の当たりにすると、ベッツィはバターや学校、時計といったものが「ただ単に」「いつも」あるのではなく、歴史上人が生み出し、知恵や労働によって維持され今に受け継がれてきたという時の連続性と、そうした人々の叡智の営みを現に自身が享受しているという過去の人々との有機的な繋がり、そしてそこから自らの存在のルーツに気付く。こうして彼女はアメリカの開拓時代の歴史的文脈に自らを配置し、一日前まで一顧だにしなかった自身の先祖達との系譜的繋がりに国民的・民族的帰属意識を芽生えさせるのだ。生後半年にして両親を失い孤児となり、そして家族の繋がりや系譜を（パットニー家の悪口以外）フランスから聞かされずにいわば過去から断絶されていたベッツィにとって、この気付きが彼女に個人としての存在意義とアメリカ人としての民族的、国民的アイデンティティを育ませることになる。

ここで明らかに強調されているのは、フランス達が居住する都市部の現代的生活様式と対照化されたヴァーモントの未だ開発が進んでいない農業地帯が象徴するアメリカの伝統的農業主義的生活様式である。フランス達の住む場所は明示されていないが、“in the middle of this country” (1)という表記と、ベッツィが通っていた学校は四階建ての煉瓦造りの建物で、一クラス四十人もの生徒がいたことや、道路はアスファルト舗装されていることから、アメリカ中西部の中規模都市、おそらくシカゴが作者の念頭にあったと思われる。1900年代当時アメリカで急速に発達した都市の中で中西部に位置していたのがシカゴである。一方東部ヴァーモント州のパットニー家は、おばアビゲイルとおじヘンリーが一度もアスファルト道路を目にしたことがない程田舎の農村地帯で、食物は店売りのものを買っていたフランス達とは対照的に、パットニーの人々は自分達が食すものはほぼ農場で自給自足する生産者達である。バターや鉛筆やマッチがどこからどう生み出されるのか、考えもしなかった消費社会の申し子ベッツィが、牛の乳を搾りそれを攪拌しバターを作る過程を自ら経験することで、一つ一つのものに含まれた働き手の営みとその人間的温かさを実感、自分の身体を使って働き何かを生み出すことの悦びと達成感を学ぶ。この都市／田舎、文明／自然、消費／生産の対照的構造が、対照の後者ほどベッツィの成長に貢献しており、明らかに田舎農村地帯が作者によって理想化されている。このフランスの家庭とパットニー家の地理的、環境的二項対立構造の中で、パットニー農場の非文明的ながら自給自足的でかつて西部開拓時代の開拓者的な生活様式は、アメリカの理想である自由、独立の精神を称揚する。ヘンリーが“I tell you, in the

old days folks knew how to take care of themselves more than now.” (81)と述べるように、過去の開拓者達の生き方、即ち独立独歩の精神と自己信頼に基づく開拓者精神というアメリカの理想的国家理念がここでは称賛されているのだ。そしてこの伝統的なアメリカの精神への目覚めと受け入れが、フランシスの過度な介入によって自己価値を見出す足掛かりを奪われ常に何かに怯えていた少女ベッツィを、身体的発達のみならず、アメリカの精神を受け継ぐいわば「良きアメリカ人」として生まれ変わらせるのだ。

フランシス達一家とパットニー家の対照は、それぞれの家屋や室内の装飾にも表れる。興味深いことに、虚弱であったベッツィが置かれていた環境、つまりフランシス・ハリエット親子一家の描写には、「アメリカ的」パットニー家とは対照的にフランスといったヨーロッパ的なイメージを持たせる描写が多い。例えば “[N]ot very rich or very poor” (1) と示される中産階級のハリエット母娘の家は、ソファの上にはゆったりと襷のある上掛け (throw) が掛けられ、窓にはレースのカーテン、また十九世紀アメリカでフランス的趣向が好んで取り入れられたパーラー (応接間) の仕切りカーテン (portière) 等、パットニー家にはないヨーロッパ的な調度品や装飾が見られる。フランシスが十分な知識がないにも拘らずベッツィに自宅で教えようとするのもフランス語である。一方パットニー家の室内は、クレトン (cretonne) やスイス (Dotted Swiss) という丈夫で軽く実用的な綿織物で出来た布製品が多く使われている。そしてこれらの布地はどれも “bright-colored” (40) と明るい色で、陽光が差し込む明るい室内に更に彩を加えている。ベッツィはこの洗練されたというより実用的で素朴な部屋を農場に到着当初は “very poor and common” (168-169) で “ugly” (25) と形容していたのだが、物語後半ではここを訪れたフランシスに “Isn’t this the loveliest place!” (168) と熱心に問いかける (フランシスはこのベッツィの問いかけには賛同せず、部屋に関心を示さない)。

この両家の対照化、とりわけ「アメリカ的」パットニー家とフランシス達の対比は、両者が共通して持つ本、ラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson) の著書 *Essays of Emerson* (1841, 1844) の扱い方に如実に表れる。アメリカ思想の父と謳われる文学者・思想家エマソンは、超絶主義、自己信頼 (self-reliance) などの思想を唱え後のアメリカの思想形成に甚大なる影響を与えた。フランシスの家のテーブルにはこのエマソンの本が置いてあるが、その本は誰も読んだことがないために常に “new and shiny” (30) のままであり、それは一家がこの本に関心を持たないことが表されている。一方パットニー家では同書をアビゲイルが就寝前に読む場面があり、その本は “worn old book” (30) とあることから、彼女が何度もその本を読んできたことを示す。エマソンの本を装飾的に室内に配置するのみで中身に触れようとはしないフランシス達とは対照的に、本を熟読するアビゲイルの姿は、パットニー家の人々が幼い子供にさえ配慮を見せる、個人の意思の尊重や主体性の重視といった態度が、彼らがエマソンに学んだものであり、彼らがエマソンの思想を精神的拠り所として受け入れ実践していることの証左である。

この伝統的なアメリカの精神を称揚するパットニー家の姿は、彼らが農民として先祖から受け継いだヴァーモントの土地に深く根付く生活姿勢にも表れる。上述のように、何ごととも店で購入し、その物に商品以上の価値を見出さないフランシス達に対し、パットニー家は土地に根付き土地が与えてくれる果物や飼育する動物達の乳や肉を食し生きる。その生活の知恵は開拓者であった親から子へと受け継がれた経験による知識と技術によるものであり、アビゲイルが一世以上も前の人々も今の自分達の生活もそう変わりはしないのだと述べるように (45)、彼らは時代の変化に流されず土地に生活を依拠し土地と共に生きる姿勢を見せる。これはベッツィの養育を実母ハリエットではなく子育ての専門書や通信教育から学ぼうとするフランシスの姿とは対照的であり、更にその土地に

根付かぬフランスの不安定さは、彼女が結婚後も夫に連れられ “We are not going to live anywhere.... always moving around from one place to another, never more than a month anywhere.” (164) と定住できない姿にも象徴的に表れる。つまり、パットニー家はアメリカの理想的な伝統的価値観の体現者であり、そしてパットニー家に強い帰属意識を覚え成長していくベッツィの姿は、いわば「アメリカ化」していく少女の姿なのだ。

更に、ベッツィを他者依存の幼稚な少女から心身共に逞しい少女へと成長させるのは、彼女自身が自己の能力に自信を見出す、自立心と自己信頼への目覚めである。フランスの過剰な庇護の元に何ごととも単独でこなすことをしてこなかった、またその機会を奪われてきたベッツィにとって、世界は未知と恐怖で満ちている。街を散歩することも、学校の門をくぐることも彼女は恐怖ゆえに一人で対処することが出来ない。対してパットニー家では、彼女は当然のように一人で行動し考えることを要求される。例えば、ヴァーモントに到着早々、農場へ向かう道中おじヘンリーは突然彼女に馬車を御するように依頼する。馬を操るなど初めての経験に恐怖で叫び声を上げ拒絶しようとするベッツィだが、ヘンリーは一向にお構いなしで彼女に手綱を託す。恐怖に慄きながらも仕方なく手綱を持つ彼女だが、思いがけなく馬が彼女の意のままに移動することに気付くと、彼女は馬を御することが出来る自分に得意になる。

“It’s not right or left that matters!” she ended triumphantly; “it’s which way you want to go!” (21)

The color rose hot on Elizabeth Ann’s happy face. If she had started a big red automobile she would not have been prouder. For it was the first thing she had ever done all herself ... every bit ... every smith! She had thought of it and she had done it. And it had worked! (22)

これが彼女が九歳にして一人で考え一人で行った初めてのこととなるが、パットニー家ではこれ以降も大人達がベッツィに必要な以上の指示をすることはない。例えばベッツィがアビゲイルに林檎ソースを作るように言われる場面では、自分は作り方など知らないと狼狽するベッツィに、おばはベッツィが自分が美味しいと思うまで煮詰めた林檎に砂糖を加えれば良いとだけ言い、“I guess the rest of us will like it.” (78) と彼女が美味しいと思うなら自分達も美味しいだろうと少女に信頼を示す。事実彼女はソースを容易に作り上げ、しかもその味は “it was the very best applesauce ever made.” (79) と彼女に大きな誇らしさと自信を芽生えさせる。この経験を通し、彼女は “[T]he fact that she had never done a thing was no proof that she couldn’t.” (85) と自分の能力の可能性と自己信頼の念に目覚める。

こうした何気ない日常生活の中で得る、自分で考え自分で行動するという新たな姿勢が、後にベッツィを苦境から救い出すことになる。雪深い森の中で深い穴の中に自分より幼い友人モリー (Molly) が転落してしまうエピソードでは、ベッツィはただ泣いて誰かが助けに来るのを待つのではなく、アビゲイルの娘アンを思い起こし、「アンおばさんならどうするだろう」 (“What would Cousin Ann do if she were here?” (101)) と自問する。すると彼女はアンならまず泣くのではなくどうすべきか考えるはずだ、と一考し自らモリーを穴から救出する方法を編み出し無事成功する。またこの後も物語後半に彼女がモリーと二人で家から速く離れた祭り会場に置き去りにされてしまう出来事が起こるのだが、この際にもベッツィは再び「アンおばさんならどうするだろう」と冷静



に考え自力で帰宅する方法を練りだす。彼女は迷子になった児童の多くならそうするように、ただその場に立ち尽くし大声で泣き叫び大人の助けを待つのではなく、自宅最寄駅までの汽車賃を祭りの会場で皿洗いをして稼ぎ、その賃金で購入した切符によって汽車に乗り無事農場まで帰宅するのだ。この勇敢な少女の行為に、普段冷静で口数の少ないパットニー家の大人達は大いに感嘆し、感情をあまり表に出さないアンですらベッツィを膝に乗せて抱き締め、“I think I never heard of a child's doing a smarter, grittier thing ... *and I don't care if she does hear me say so!*” (151) イタリア体原文) と賞賛する。こう自分を褒め称える大人達に、ベッツィは胸を高鳴らせ、“She had done something to make the Putney cousins proud of her!” (150) とそれまで感じたことのない大きな喜びを得る。

こうした子供の潜在能力を認め、自立心や自己信頼を重視するパットニー家の姿勢は、作者キャンフィールドが強く支持したモンテッソーリ教育の理念を色濃く反映したものである。モンテッソーリ教育とは1907年イタリアのローマで医師のマリア・モンテッソーリ博士(Maria Montessori)によって創設された、当時としては独自の教育方法によって子供の潜在能力を高め、自立心ある個人へと成長を導くことを目的とした教育法である。この教育法の特徴の一つは、博士が考案した玩具を用い、親や教師など大人は子供への指示や介助などの介入は最小限度に抑え、出来る限り子供自身が自らの意志や本能によって行動するよう促し見守る方法を導入していることである。これは、創始者モンテッソーリが幼少の子供にも内在する生まれ持った人間の能力に絶対的な信頼を置いていたことを反映したものである。現在では110か国以上で実践されているこの教育法であるが、アメリカにこの教育法を導入し普及に大きな役割を果たしたのがキャンフィールドであった。彼女が唱えたモンテッソーリ教育法は、創始者モンテッソーリの教育方法をアメリカの社会状況に適応させたものであったが(Cossentino 2576, 2596)<sup>(7)</sup>、キャンフィールドは創始者の子供の個性と能力重視の教育法を強く支持し、当時アメリカ都市部で行われていた画一的な大人数の授業編成や科学的知識に頼る親、特に母親の過熱する専門家への依存傾向などを疑問視し、子供の個性と個々の能力に重点を置いた教育への転換を唱えた(Wright 214)。

物語でベッツィが通う村の学校では明らかにこの教育理念が活かされている。フランシス達と街にいた時に彼女が通っていた学校では、児童の年齢によって学年が固定化され、また教室では学力の差があっても一律の教育内容であるため、ベッツィのように読む能力に長けた生徒は授業中出来ない生徒に合わせてやらなければならない、ベッツィはリーディングの授業では退屈し学習意欲を減退させてしまう。一方ヴァーモントの学校は、ベッツィが驚くことに学年が年齢によって定められておらず、個々の科目の習熟度によって柔軟な学習内容が適用される。リーディングが得意なベッツィは一気に七年生へと上がり、苦手な算数では二年生と、生徒の能力度別に教員が個々に学習内容を変えるのだ。この際教員が生徒に逐一指図したり誤りを細かく指摘したりすることはない。むしろ学年の枠にこだわるベッツィを教師は滑稽に思い、“You aren't any grade at all, no matter where you are in school. You're just yourself, aren't you?” (64-65) (イタリア体原文) と笑う。この思いがけない学校制度の違いにより、ベッツィは瞬く間に勉強することに面白さを見出し学習への意欲を高め、知識のレベルが上がり成長する自分自身の能力の可能性を認識するに至る。

このように、パットニー家に来たベッツィはほぼ別人と言って良い程大きな成長を遂げる。この肯定的に描かれる彼女の変化には、上述した通り彼女がおば達を通して過去と現在の有機的な繋がりに気付く、その過程で自らをアメリカの歴史の中に位置付けることによる帰属意識の芽生えが重要な要因になっている。また、パットニー家で様々な経験や学校教育を通し、彼女は受け身的で個性を埋没させた他者依存的性格から、自立心溢れる少女へと変貌する。この彼女の成長の過程は、

彼女の自由、自立の精神を宿した「良きアメリカ人」への変化の過程であり、言い換えれば、ベッツィそしてヴァーモントの農村地帯の人々と彼らの生き方、環境こそが「良きアメリカ」の姿として理想化され表象されているのだ。

このパットニー家の農村地帯における十九世紀的生活様式の理想化は、作者キャンフィールドの農村地帯としてのヴァーモント州に対する意識を色濃く反映したものである。彼女の他の作品 *Hillsboro People* (1915) や *Vermont Tradition, The Biography of an Outlook on Life* (1953) にも明確に示されるように、キャンフィールドは作品が出された 1900 年代初頭当時急激に工業・産業が発達し、ニューヨークやシカゴ、フィラデルフィアなどを中心に大規模な都市化が進んでいた時代において、ヴァーモントの地を人が深い人間的繋がりを持ち、かつ人が真の意味で自由たり得る場所と捉えていた (Washington 47, 225)。この作者の思考は、当時多くの中流階級アメリカ人によって共有された思考でもある。急激な産業化の発展や都市部への大規模な人口流入、電気機器や自動車の流通による大衆の生活様式の変化、またそれに伴う大量消費社会の出現など、激動の時代と言われた 20 年代を目前に控え、彼女を始めアメリカの多くの人々の間には、十九世紀末までのアメリカの伝統的生活様式と開拓者精神といった精神性と価値観が理想化され続けながら、一方でその消滅が危惧されていたのである。

本稿冒頭で述べた通り、この *Understood Betsy* は戦後 GHQ/SCAP の機関である CIE によって日本の民主化教育材料の一つとして選抜され、読書奨励されたものであった。上記の考察から、当作品の具体的にどのような点が、占領下の日本人読者に民主的で好ましいアメリカのイメージを与え得ると占領当局が解釈したのかを推察することが出来る。ベッツィを常に幼児とみなし過剰な庇護により子供の受動性を助長させるフランシスとは対照的に、ベッツィの個性や感情を尊重し大人と同等に扱おうとするパットニー家のベッツィ成長への明らかな貢献は、個人とその平等を重んじ対等な関係性を尊ぶアメリカの民主的社会を象徴的、効果的に表すと考えられたのではないだろうか。とりわけ、コミュニティ内の人間同士の繋がりが密で、かつ村の貧困家庭の育児放棄された少年をベッツィや村の子供達、大人達が協力し助けようとする例のように、年齢や性別に関係なく村内の人間同士が交わり相互支援するヴァーモントの環境は、理想的な民主的社会を効果的に描き出している。また、先述した通りベッツィの新たな気付きと意識変化の過程で、アメリカの歴史、とりわけ開拓者達の生活と知恵が称揚される内容は、西部フロンティアをアメリカ民主主義の源泉と捉えるアメリカの伝統的な歴史観、西部言説に通底するものであり、ゆえにこの作品は占領当局者にとって異国日本に「アメリカの原点」を教授するに最適な教材と映ったのではないだろうか。

興味深いことに、戦後占領期 GHQ/SCAP により日本で読書奨励されたアメリカの文学作品には、西部開拓時代を舞台とする作品が多い。筆者拙論「思想教育と文学の政治学 ― GHQ/SCAP の日本民主化政策とアメリカ西部フロンティア言説の関係性」<sup>(8)</sup>にて詳述するように、戦後日本の民主化教育材料として GHQ/SCAP およびアメリカ教育使節団が選奨したアメリカ文学作品には十九世紀西部開拓時代のフロンティア、または開拓生活を描く作品 ―「西部文学」― が幾つも見られる。同様のことは同じく民主化教育材料として使用されたアメリカ映画にも言える。民主化教育材料の一部を西部フロンティアもしくは開拓者生活を描いた作品が特徴的に占めていたこの背景には、占領関係機関の者の多くが西部および開拓者精神をアメリカの民主主義、自由・独立を重んじる精神性といった「アメリカらしさ (Americanness)」と強く結びつけていた事実がある。*Understood Betsy* は北東部ヴァーモント州を舞台設定としており、時代も西部開拓時代を描いたものではなく二十世紀初頭であるため西部文学には該当しないが、上述してきたようなパットニー家におけるベッツィの変化と成長は、この開拓者およびその精神をアメリカの原点、理想的国家像とす

る戦後アメリカの歴史解釈、延いてはアメリカの自己意識もしくは自画像に沿っていたものと言えるだろう。興味深いことに、*Understood Betsy* の訳者中野好夫、中村妙子は日本語訳『ベッツィ物語』巻末の「あとがき」にて、作者キャンフィールドを「ニューイングランドのヴァーモント州に最初に移り住んだ、いわゆる『開拓者』の子孫であると紹介し、更に物語に描かれる家族団欒の描写は「ドロシー自身が幼い頃から幾度か聞かされたなつかしいお話なのでしょう」(253)と述べ、この物語をキャンフィールドが開拓者の祖先より伝達されたいわば開拓者の記録として解釈している。これは少なくとも訳者である彼ら二人がこの物語をアメリカの西部開拓時代という特定の時代と結びつけて受容していたことを示す。

しかしながら、この物語は単にアメリカの自由、自立、個人主義の精神や農業主義といった伝統的アメリカ像を称揚するのみに留まらない。本作品では、女性の登場人物、具体的にはベッツィのおばアン、そして物語後半成長を遂げるベッツィ自身の描写に、作者キャンフィールドの伝統的女性性概念に対する明らかな挑戦が読み取れる。農村地帯で十九世紀的な昔ながらの自給自足的生活を営むパットニー家は「良きアメリカの家庭」像の典型であると言えるだろうが、しかしこの一家の娘アンは、その男性的イメージから家父長制に基づく伝統的女性性概念にいわば挑戦する存在として現れるのだ。

ハリエットとヘンリーの娘でベッツィのおばに当たるアンは、目は黒く濃い色の髪色で頬は健康的な赤みがあり、大変背が高く頑強 (“very tall and strong-looking” (23)) な容姿の、推測するに年齢は四十代の未婚の女性である。その眼は黒く “bright” (39) と生き生きしており、背の高さに比例して手が長く、背中中は真っすぐに伸び、凛として逞しく、その動きは “briskly” (38) や “promptly” (38) という表現が用いられるように、俊敏で快活、身体的に力強い印象を与える。ベッツィがパットニー家に到着した際、彼女を馬車席から持ち上げ “a long, strong step or two” (23) で彼女を玄関にひらりと降ろし、またベッツィが食卓で眠ってしまった際には彼女をまるで赤ん坊のように軽々と抱いて寝室に運ぶのもアンである(28)。更に物語の後半、ベッツィと幼いモリーが二人だけで遠い祭りに会場に残されるエピソードでは、心配で青ざめる母アビゲイルとは対照的に、アンは父親と共にすぐさま二人を探しに馬にまたがり飛び出していく機敏さと行動力を見せる。アンは家でアイロンがけや裁縫といった伝統的に女性が主として担ってきた家事をこなす一方、畑では “in a very short old skirt and a man’s coat and high rubber boots” (91) と記されるように短いスカートに男性用のコートと長い皮ブーツを着用し、カエデ糖作りのように大鍋や火を扱う肉体労働も巧みにこなす働き手でもある。家内の役割分担でも、食事の用意の役割の他、多くの場面が父親のヘンリーと高い木に上り果物の収穫や馬を扱う屋外作業に従事する等、一家の中心的労働力である。加えて随所に現れる “bright” (39), “strong” (23), “firm” (116), “sharp” (97), “brave” (98) といった形容詞が彼女を表現するように、その頑丈な身体的容姿と厳格な性格から、アンは明らかに男性的なイメージで現れる。白い肌に薄い青色の眼を持ち、手にはパラソルと手袋、顔には白いベールをかけて現れるフランシスの女性的なイメージとは対照的である。またアンは幼少時他の少女達が夢中になった人形遊びには見向きもしない少女であった(108)ことから、彼女が幼少時より社会の慣習的ジェンダー概念に沿わない女性であったことが見て取れる。

彼女の「力」は家庭の中でも明らかである。パットニー家の飼い犬シェップ (Shep) はその巨体に似合わずアンにひどく怯えており、その様子はアビゲイルが “I’m glad I’m not an animal on this farm. Ann does boss them around so!” (48) と冗談ながらも彼女の犬への手厳しさを示す。アンはこれに対し “Well, *somebody* has to!” (48) (イタリック体原文) と返し、家庭内には誰か一人は家を厳しく統率する者が必要だと主張し、父親ではなく自身が一家の指揮役の立場にあるこ

とを示唆する。家に電話がかかってくる場面でも、電話に出て応対するのは父ヘンリーではなくアンである。また、夜の団欒の場面では、ヘンリーがベッツィにチェスをしようと言い出すと、彼女は父に遊ぶよりも壊れた馬具を修復すべきだとたしなめ、彼を叱られた時の犬のようにしょんぼりとさせてしまう。一時の娯楽よりも一家の生計を担う馬を重視し家庭の経済状況を注視する彼女の姿は、女性でありながらも両親に代わる一家の担い手の位置を占める。こうしたアンは、当時社会に広く流通していた未婚女性の悲劇的なイメージに明らかに抵抗するものである。伝統的なジェンダー概念の下では、女性が結婚適齢期を超え未婚であることは「オールド・メイド (Old Maid)」という言葉が示唆する通り、女性に非を見出す忌むべきこととして軽蔑的に捉えられていた。対して四十歳代と思われる未婚女性アンには、そうした悲劇的な要素は微塵もない。むしろパットニー家はアンは屋内外両方における労働と役割の遂行によって生活が円滑に進んでおり、その関係性は三者それぞれが役割を持つ公平な関係性にある民主的な家族像である。

この男性的な身体と性質を持つ女性アンが、物語の後半ベッツィが理想とし、自らの行動の指針とする女性像となる。アンに出逢ったばかりの頃のベッツィは“Elizabeth Ann was not sure that she liked Cousin Ann, and she was very sure that she was afraid of her.” (39)と、アンに当惑と恐怖の眼差しを向ける。しかしこの後、上述したようにことある毎にベッツィが「アンおばさんならどうするだろう」と自問し問題を自分で解決することが示す通り、アンはベッツィにとって自身の行動の指針であり理想となるロール・モデルとなっていく。それは彼女が、ベッツィがそれまで抱いたことのない新たな物事の見方、思考の在り方——フランシスとは対照的な思考——を提示するためである。例えば、ベッツィが上手く出来なかった学校の試験のことを（それまでフランシスに対してしてきたように）アンに泣きそうになりながら報告する場面では、試験での失敗を人生の終わりのように捉えるベッツィに対し、アンは試験とは挑戦を受けるようなものでむしろ面白い（“I thought they were sort of fun.... Like taking a dare...” (92)）と言ってベッツィを驚愕させ、更に万一失敗したとしても大した問題ではないと次のように一蹴する。“[I]t doesn't matter if you really know the right answers, does it? That's the important thing.... I guess Hemlock Mountain will stand right there just the same even if you did forget to put a b in 'doubt'....” (92-93)ここでは、アンがベッツィがスペルミスをしたアルファベットのbと農場の彼方に聳え立つヘムロック山を対比させ、日常の微細なことに神経を尖らせるベッツィに、広い視野と本質的に物事を見極めることの重要性を悟らせる。このアンは態度は、フランシスがベッツィの“every little thing” (7)を聞きたがり、大小全ての事柄を過大視し泣いたり狼狽したりと共感を示す姿勢とは極めて対照的である。このアンとの会話後、ベッツィの目には山がより高く大きく見え、彼女は山頂から見た自分はさぞ小さく見えるのだらうと想像し、自然の雄大さに対比した自身の問題の矮小さに気付き、最後には試験に失敗した自分に感じていた惨めさも泣き出したい気分も一掃されてしまう。これ以降彼女はアンに全面的信頼を寄せ、問題が起こる度に「アンおばさんならどうするだろう」とアンを思考判断の基準とし、アンと自身を自己同一視し始めるのだ。

このベッツィのアンとの自己同一視および明確に示されるベッツィのアンへの畏敬の念は、フランシスに表象される伝統的な理想的女性像を転覆させる。物語の後半、フランシスがベッツィを迎えにパットニー家に到着する場面では、フランシスとベッツィの間には明らかに次のような差異が生じている。

Aunt Frances hugged Betsy again and again and exclaimed about her having so grown so big and tall and fat — she didn't say brown too, although you could see that she was



thinking that, as she looked through her veil at Betsy's tanned face and down at the contrast between her own pretty, white fingers and Betsy's leather-colored, muscular little hand" (163).

ここでベッツィは“so big and tall and fat”,そして“muscular”な少女に変化しており、屋外での活動に裏打ちされた日に焼けた逞しい男性的な手を持つベッツィは、もはやフランシスの知るベッツィではない。また、フランシスとその母ハリエットがパットニー家の人々を忌み嫌う理由の一つに、彼らが子供に家事手伝いをさせることにあり、それはフランシス達の目には子供への思いやりを欠いた、まるで召使いのような扱い(3)に映る行為であるわけだが、一方手際よくじゃが芋を洗いオープンに入れながら“I always see to the potatoes and the apples, the cooking of them, I mean.”(169)と食事の用意という家庭内の役割を誇らしげにこなすベッツィは、自分に目を見張るおばに対し、身をもって働くこと、役割を持つことへの悦びを示し、フランシスに対峙する。更には“Betsy had a disappointment.”(169)と明確にあるように、ベッツィがフランシスにパットニー家での自分を知ってもらおうと、自分に割り当てられた仕事や農場の動物達を見せようとするが、フランシスがそれに否定的な驚きや恐怖を表す姿に彼女は失望し、フランシスと自分との間の溝を実感する。

そしてその失望は二人の関係性を一転させる。ベッツィは突如フランシスに幼いモリーに対して抱くような感情を抱く(170)。彼女はおばのか細い震えた白い手を自らの“strong brown hands”(171)で包むと、“Oh Aunt Frances, darling Aunt Frances! ... How I wish I could *always* take care of you.”(171)(イタリック体原文)と叫ぶ。かつて庇護者と被庇護者であったフランシスとベッツィの関係性は、ベッツィの成長と変化によって一転し、強い茶色の肌をした男性的なベッツィが、か弱い色白のおばフランシスの庇護者役へと転換するのだ。フランシスが、婚約者が自分と結婚する理由は“[H]e just loves to take care of people. He says that's why he's marrying me.”(164)と述べて彼女が今後生涯夫に庇護され続ける女性であり続けることを示唆する一方で、ベッツィはフランシスではなくパットニー家に残ることを選択することで、フランシスの非主体的で庇護される者としての伝統的女性性像から決別するのだ。

強靱な身体を持ち、自信に溢れ主体的行動を見せるアンの女性像は、二十世紀初頭プログレッシブ時代(Progressive Era)と言われる時代に登場した「新しい女性(New Woman)」像に合致する。十九世紀末までの、純粹・信仰心・従順・家庭的を理想的女性性、淑女(Lady)と特徴付ける家父長制に基づく伝統的女性性概念は、十九世紀末より1920年代に女性参政権運動を中心とする第一次女性権利運動の高まりと共に、その根を深く社会に残しながらも白人中産階級層を中心に徐々に変化を見せ始める。1910年代既に名の知れた作家であり、当時の女性としては稀なことにフランス文学で博士号を修得し知的階級層で強い社会的影響力を誇ったキャンフィールドは、自身が「新しい女性」であったと言える。彼女はフェミニストと自認することはなかったが、彼女が人は性別に関わらず自らが最も生産性が高く活躍できる場に位置付けられるべきという信念を抱いていたことは(Washington 115, 121)、換言すれば、彼女は性別によって公私の領域を厳密に区分けする伝統的な性別役割分業(separate spheres)に抵抗し、一人の個として人間を見る急進的なジェンダー観を抱いていたことが分かる。このアンの新しい女性の在り方が、少女ベッツィに理想的な女性像として受容され、受け継がれていくことは、作者は明らかにフェミニズム的思想を持って未来のアメリカの女性の在るべき方向性を示していたと言える。本稿前半で引用したカミンズの、本作品は「アメリカニズムを本質化するものではなくジェンダーや民族的差異を内包させることに



よって『拡大』させる』<sup>(9)</sup> という指摘はまさにこの点にある。

但し、この新しい女性像を描き出す本作品が戦後日本の教育材料として選ばれた 1940 年代後半から 50 年代のアメリカは、戦後好景気の中伝統的なジェンダー概念が再燃し、中流階級以上の白人家庭を中心に、女性の行動領域を家庭という私的な場に結びつける保守的なジェンダー概念が広く再理想化された時代であった。大戦により家庭外賃金労働への女性の従事者が増加する社会的変化を経ながらも、尚アメリカでは女性性を家庭性や母性と同一視する風潮は根強く残存、むしろ富裕層ではそれが再補強される傾向が強くあった。この時代的背景を裏付け、上村千賀子が指摘する通り、GHQ/SCAP による戦後日本の占領政策は、日本の従来の男性中心的封建社会制度を解体し民主的な男女の平等な関係に基づき構成される社会へと変革することを目的としながらも、その改革はあくまでアメリカ自身が伝統的に保持してきた性別による行動領域の区別、性別役割分業を前提としたジェンダー規範に則ったものであった。実際、連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサー (Douglas MacArthur) は、戦後の改革においても日本人女性がフェミニズム運動を展開することや女性のための政治組織を結成することには反対の意向を明示していたという (上村 28)。つまり、上述されたような *Understood Betsy* におけるアンやベッツィが象徴的に表す新しい女性像、即ちか弱さや受動性といった伝統的に女性性と結びつけられたイメージ領域の枠組みを超え、男性の領域とされた主体性、行動力や身体的強靱さを伴う女性像は戦後当時のアメリカにとってもまだ到達出来ていない女性の姿、具体的には家父長制を性差別の根源と糾弾した 1960 年代第二次フェミニズム運動以降の女性の姿であり、おそらく GHQ/SCAP や占領関係者が意図した「理想的アメリカの女性」の在り方の先を行く女性像であったと言える。

この脱規範的な女性像を称揚する児童文学作品が、CIE 関係者達に具体的にどのように解釈されたのかは先述の通り不明であるが、この当時としても急進的であった女性像から判断するに、本作品が効果的民主化教育材料として選ばれたのは、やはり上述の議論における、ヴァーモントの地そして開拓時代の歴史的記憶が少女ベッツィの内に育む自主・独立、自己信頼の精神が、まさにアメリカが理想としてきた国家理念に通底するものであり、その精神が少女の成長を通して効果的、好意的に称揚されているがゆえであったと結論付けることが出来よう。「新しい女性」アンについては、彼女の姿が実際どのように解釈されたかを論じることはここでは出来ないが、推測するにアン自身が先に挙げた男性的とされる労働作業に加え、アイロンがけや裁縫、料理といった女性が伝統的に担ってきた仕事をもこなし、かつベッツィもまた家庭内での役割をこなしながら成長する姿が伝統的な性別役割分業の概念に沿うものであることから、本作品は必ずしも伝統的ジェンダー規範を覆すものではなく、それぞれ家族構成員が与えられた役割を果たし相互に助け合う家族像という面が民主的家族像として評価されたのではないだろう。

だがそれでも尚、もしくはこの急進的な女性像ゆえに、本作品は戦後日本における受容・解釈という視点で見た場合、好意的なアメリカのイメージを形成した可能性もある。即ち、歴史や伝統を受け継ぐ人々の生活、それに培われた自主・独立の精神や開拓者精神という伝統的価値観を維持・尊重するアメリカと、一方でアンやベッツィのように女性が主体性をもって生きるアメリカ、そして性別や年齢に関わらず家族構成員が対等な関係性の基に家庭生活を営むアメリカの姿は、アメリカの歴史に裏打ちされた社会的盤石さと先進性、浸潤した民主主義思想といった好ましいイメージを生成している。実際日本の読売新聞編集部による本作品の紹介では、ベッツィが「浅薄で極端に神経質な都会仕込みの貴婦人となる代わりによく均整の取れた、<sup>まき</sup>そう明なアメリカ婦人として成長するであろう」と述べ、彼女を好ましく評価している<sup>(10)</sup>。本作品が実際に日本人読者にどのように読まれ、解釈されたのかは日本における本作品の詳細な受容調査を待たねばならず本研究の今後

の重要課題として残るが、この一見素朴な農村生活と少女の成長を描く物語は、占領国、戦勝国アメリカという覇権的イメージとはかけ離れた、親しみや共感を喚起させる肯定的アメリカのイメージを提示していると言えるだろう。

*Understood Betsy* が占領下日本の民主化教育材料の一つとして選ばれた戦後 1940 年代後半は、折しも冷戦の勃発により、米ソがそれぞれの覇権を目指し熾烈なプロパガンダ闘争を展開し始めた時期である。冷戦期アメリカでは、文学作品や雑誌などの図書は冷戦を勝ち抜くための武器、「紙の弾丸 (paper bullets)」(Hench 70) とみなされ盛んに利用されることになる。即ち、図書はソ連に対抗しアメリカを理想的民主主義国家として好意的なアメリカ観を読み手に形成させるソフト・パワーとして機能したのである。本稿が論じてきた *Understood Betsy* もまた、冷戦というより広範なコンテクストから見れば占領下日本の読者に模範的且つ理想的民主主義社会像を提示すると同時に、かつての敵国アメリカを憎悪と恐怖の対象から憧憬や親しみやすさといった好意的イメージへと転換させる政治的役割を担っていたのである。

この図書と民主主義思想教育という関係性は、1920 年代既にキャンフィールドの念頭にあり彼女が重要と考えていたものである。1927 年、キャンフィールドは後に自身が（初の女性）会長となるアメリカ成人教育協会（American Association for Adult Education）に委任され、アメリカの成人教育、大衆教育の重要性を唱える *Why Stop Learning?* を刊行する。アメリカ成人教育協会は、カーネギー財団がその莫大な資金により設立・支援した協会で、財団の創設理念である知の普及と拡大を基に（Rose 141）激変の時代であった 20 年代アメリカの成人教育の推進を目的に設立された団体である。とりわけ当協会が目指した成人教育は、移民の増加や第一次世界大戦以降社会主義的風潮の興隆による社会変化の最中、アメリカ市民に共通の歴史認識や民主主義的思想、価値観を教育し、「アメリカ市民」としての国民意識を啓発することで国家的統合を図ったものであった（志々田 94）。キャンフィールド自身成人教育を「アメリカ民主主義を維持し続ける闘い」の重要な要素と捉えており（Washington 194）、カーネギー財団から後に *Why Stop Learning?* と題し出版されることになる本の執筆依頼は、まさに彼女が「民主主義国家の市民にもっと広く本を行き渡らせ読んでもらう必要性を深く心慮」していた時に訪れた申し出であった（Washington 196）。本書の冒頭、彼女は本書執筆の動機は「民主主義の存続に関心のある方なら誰でもそうでしょうけれど、私は常に頭の隅に教育の問題があった」為だと述べている（vii）。この *Why Stop Learning?* は 1920 年代後半に書かれた教育書であり、*Understood Betsy* とは発行された年もジャンルも異なるが、しかし彼女の上記発言が示すように、キャンフィールドは 20 年代という早期から「民主主義のための本」を念頭に、本そして読書と民主主義教育の関係性に強い意識を抱いていた作家、社会活動家であったことが分かる。これは彼女が大きな影響を受けた彼女の父親でオハイオ州立大学学長であったジェームズ・キャンフィールド（James Hulme Canfield）の思想に彼女が共鳴したものである。彼女は自ら執筆した父親の伝記の中で、彼が「図書館は、とりわけ優れた大学図書館は民主主義を維持し、民主主義的生活に価値を与える最前線の場合なのだ」と豪語していたと明かす（Washington 32）。この父の言葉のように、書物、そして書物を読むことを民主主義の普及と強化と結びつけていたキャンフィールドは、*Understood Betsy* を含め自身の作品の社会的効果を強く認識していたに違いない。先述の通り、*Understood Betsy* はモンテッソーリ教育の理念に強く裏打ちされた作品であり、児童文学でありながら明らかに読者層には児童の親達や他の大人達を視野に入れていた作品と思われる<sup>(11)</sup>。作中登場するフランシス、アビゲイル、アンのいわば三人の「母親」像を見れば、フランシスは彼女の優しさや子供への慈愛は評価されながらも、パット

ニー家の二人と比較した場合、愛という名の下にベッツィの個性や自立心を阻む愚かな母親像として現れる。作者はおそらく本作品を通し、1910年代後半既に激変の時を迎えつつあったアメリカの歴史と伝統に再度価値を見出し、かつその歴史と伝統により熟成されてきた自立心や個性の尊重、年齢や性別に関わらず公平な人間関係を遵守するパットニー家の人々を理想的に描き出すことによって、読者達に模範的民主国家アメリカ像を提示しようとしたのではないだろうか。

そして奇しくも後の時代、そして日本という異国の地でキャンフィールド自らの作品がアメリカの民主主義を広め移植する一つの鍵とされることとなる。アメリカでベストセラーとなり長年多くの読者に愛され続けたこの児童文学作品 *Understood Betsy* は、アメリカ国内では好意的・理想的アメリカ国家像の形成に大きな貢献を果たしたと言える。戦後日本人がこの作品をどう受容したのか、その議論は今後の調査を待たねばならないが、少女ベッツィの逞しくも清々しいその成長した姿、そして彼女が最期に「ここは幸せという美しいもので溢れている」(“That room was full to the brim of something beautiful, and Betsy knew what it was. Its name was Happiness.” (176))と心からの吐息で幕を閉じるこの物語は、占領下日本の人々に豊かで幸福な未来としてのアメリカ像を抱かせたのではないだろうか。

#### 《注》

- (1) 作者氏名の表記について、彼女の作品のうちフィクションは全て Dorothy Canfield の名により出版され、他方ノンフィクションのエッセイや書籍は全て Dorothy Canfield Fisher の名で発行されている (Washington 187) ことから、先行研究では彼女の氏名表記は Canfield Fisher と姓を併記する場合が多い。本稿でもこれに倣い当該箇所では「キャンフィールド・フィッシャー」とするが、本稿は彼女の児童文学作品 *Understood Betsy* を扱うことから、これ以降は「キャンフィールド」姓のみの記載に統一することとする。
- (2) *Understood Betsy* の翻訳権は 1948 年に生活社という出版社に落札され CIE により与えられているが、その後 1949 年におそらく当社の経済的事情による翻訳出版の遅れのために CIE から翻訳権を取り消されている (『外国書翻訳権十五冊取り消さる ― 契約不履行, 経済的破綻から』『出版文化』(昭和二十四年六月) 3 頁)。資料は発見されていないが、その後本文学作品は評論社に翻訳権が移り 1950 年の『ベッチィ物語』発行に至ったようである。
- (3) CIE による占領下日本への普及を目的に選抜された外国図書は、文学的価値の高い「いわゆる『最良本』を集めたものではなく」、占領下日本が「ポツダム宣言で宣言した義務の遂行に貢献し得るものを基準に選ばれた」図書であった。GHQ/SCAP, “SCAP Announces Initial List of 100 Foreign Copyrighted Books Now Available for Publication in Japan,” *CIE Bulletin* 26 May 1948: 14.
- (4) CIE は戦後日本におけるアメリカ図書の普及促進を図り、1945 年以降日本の主要都市二十二箇所に CIE 図書館を設置しているが、この CIE 図書館収蔵のためのアメリカ図書選抜過程については、Hiromi Ochi, “Democratic Bookshelf: American Libraries in Occupied Japan,” *Pressing the Fight: Print, Propaganda, and the Cold War* (Amherst and Boston: U of Massachusetts P, 2010): 89-111 に詳しい。
- (5) 作中登場する四名の「おば」(Harriet, Frances, Abigail, Ann) の記載について、主人公との具体的親等数が作中から不明であることから、日本語表記の「伯母／叔母」を明確にせず、「おば」と統一して記載し、Uncle Henry も同様に「おじ」とする。
- (6) 原作の引用には、Dorothy Canfield Fisher, *Understood Betsy* (Lebanon, NH: UP of New England, 1999) を使用し、括弧内にページ数を示す。日本語訳筆者。
- (7) モンテッソーリ教育法では、モンテッソーリ博士自身の許可と博士による教育方法を正式に体得した者のみがこのモンテッソーリ教育法を普及させることが認められていたために、博士自身はフィッシャーのように正式な認可なく教育法を他国に普及する活動には懸念を表していたという。しかし、フィッシャー

が1910年代に出版したモンテッソーリ教育法に関する書物はアメリカにおけるモンテッソーリ教育の認知度を高め、当国での普及拡大に重要な役割を果たした。

- (8) 鈴木紀子「思想教育と文学の政治学——GHQ/SCAPの日本民主化政策とアメリカ西部フロンティア言説の関係性」『論叢現代語・現代文化』4(2010) 157-181頁を参照。

- (9) Cummins 16. カミnzは、ベツツィとアンの間に同性愛的関係性をも読み取る。物語後半、フランシスがベツツィを取り戻しに来る前の晩、パットニー家の大人達はそれぞれ個別にベツツィに別れを告げに彼女の部屋を訪れる。アビゲイルはベツツィを無言のまま抱き締め、ヘンリーは大切にしてきた父親の形見の時計を彼女に託す。涙を見せまいとしながら “We'll miss you, Betsy.... It's been ... it's been real nice to have you here...” (161) と言い残し部屋を出るヘンリーの後、アンがベツツィの部屋に無言で入ってくる。彼女は無言のままその “strong arms” (161) でベツツィをベッドから抱き上げ強く抱き締める—— “It was Cousin Ann, who didn't make a sound, not one, but who took Betsy in her strong arms and held her close and closer, till Betsy could feel the quick pulse of the other's heart beating all through her own body” (161)。二人の抱擁と互いの胸の鼓動を感じ合うエロティックとも言えるこの場面は、アンと彼女に自己同一視するベツツィの、女性というジェンダーとセクシュアリティの在り方を複雑化させるものである (Cummins 25, 36)。

またカミnzは更に、アンとベツツィの関係性についてジェンダーの視点に加え、二人に共通する濃色の目と茶色に日焼けした肌に着目し、二人が白人種の国アメリカという人種の・民族的国家像をも拡大させるものであると論じている。碧眼に透き通るような白い肌を持つフランシスとは対照的に、アンは屋外労働作業によって肌が茶色に日焼けし、その肌は皮のようにしなやかで筋肉質である。物語の後半、成長を遂げ変化したベツツィも以前の青白い肌から茶色に日焼けし、アン同様にしなやかな腕や脚へと身体的変化を見せる。カミnzは、アンと成長後のベツツィが目の色および茶色の肌と結びつけられる描写は彼女が移民のアメリカ化を象徴しており、白人種の国アメリカという白人中心主義的国家像を問い直し、且つ内部に人種の差異や性的差異を含む多様なアメリカへとその国家像を拡大するものと議論している (Cummins 34-35)。本稿における研究はこのカミnzの研究に大いに影響を受けたものである。

- (10) 読売新聞編集部「入札されたる外国児童図書——主要目録」『白象』(昭和24年) 246頁。
- (11) モンテッソーリ教育は日本では1912年に初めて紹介されて以来、1920年代にかけて徐々に検討と実践が成される。この教育法が日本に深く根付くことはなかったが、1920年代当初はこの教育の主軸である子供の自発性を重んじる教育の在り方に、日本人教育者が「憧れ」を抱いていたという(土山きよみ他「わが国におけるモンテッソーリ教育法の受容第一期」『鳴門教育大学研究紀要』第8巻(1993) 112頁)。心理学者野上俊夫は「フィシャー女史の観たるモンテッソーリ式幼稚園」(『教育学術界』第27巻第3号(1913) 9-19頁)にてキャンフィールドのモンテッソーリ教育について論じており、キャンフィールドが日本でも「憧れ」の欧米的教育法の一人者として認識されていた可能性は高い(平田勝政、馬木葉々子「戦前日本におけるモンテッソーリの障害児教育への影響に関する歴史的考察——モンテッソーリ関係文献の整理・検討を中心に」『長崎大学教育学部紀要』第71号(2007) 18頁)。このことから、*Understood Betsy*, そして作者キャンフィールド自身もまた教育者として好意的なアメリカ像を日本人読者に生み出すことに貢献したと言えるだろう。

#### 引用文献

- Conn, Peter. *Pearl S. Buck: A Cultural Biography*. Cambridge, NY: Cambridge UP, 1996.
- Cossentino, Keith Whitescarver Jacqueline. “Montessori and the Mainstream: A Century of Reform on the Margins,” *Teachers College Record* 110.12 (2008): 2571-2600.
- Cummins, June. “*Understood Betsy*, Understood Nation: Dorothy Canfield Fisher and Willa Cather Queer America,” *Children's Literature* 32 (2004): 15-40.
- Fisher, Dorothy Canfield. *Why Stop Learning?*. NY: Harcourt, Brace and Company, 1927. Digital Library of India, 20 Nov. 2019 <<https://archive.org/details/in.ernet.dli.2015.74313/page/n7>>.
- GHQ/SCAP, “SCAP Announces Initial List of 100 Foreign Copyrighted Books Now Available for

- Publication in Japan," *CIE Bulletin* 26 May 1948: 13-14.
- Hench, John B. *Books as Weapons: Propaganda, Publishing, and the Battle for Global Markets in the Era of World War II*. Ithaka and London: Cornell UP, 2010.
- Rose, Amy D. "Beyond Classroom Walls: The Carnegie Corporation and the Founding of the American Association for Adult Education," *Adult Education Quarterly* 39.3 (1989): 140-151.
- Wright, Elizabeth J. "Home Economics: Children, Consumption, and Montessori Education in Dorothy Canfield Fisher's *Understood Betsy*," *Children's Literature Association Quarterly* 32.3 (2007): 213-230.
- Washington, Ida H. *Dorothy Canfield Fisher: A Biography*. Shelburne, VT: The New England P, 1982.
- 上村千賀子「昭和 20 年代の婦人教育 — 占領前期における占領政策と婦人団体 —」『婦人教育情報』18 (1988) 25-32 頁。
- 志々田まなみ「F. P. ケッペルのフィランソロピー論」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第 3 部第 51 号 (2002) 91-98 頁。
- 読売新聞編集部「入札されたる外国児童図書 — 主要目録」『白象』(昭和 24 年) 246 頁。